



<資料>紀伊大島におけるチガヤとススキの利用と保全

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 梅本, 信也, 山口, 裕文 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24729/00009677">https://doi.org/10.24729/00009677</a>

## 紀伊大島におけるチガヤとススキの利用と保全

梅本信也\*・山口裕文

(\*京都大学農学研究科亜熱帯植物実験所；大阪府立大学農学生命科学研究科生態保全学)

### 要 旨

和歌山県紀伊大島では、江戸時代以来、半農半漁が営まれてきた。ここでは生活を支える重要な植物資源としてイネ科のススキ *Miscanthus sinensis* とチガヤ *Imperata cylindrica* が共に利用され、持続的に保全されてきた。両草本の利用と保全的管理の関係史は以下のようにまとめられる。

(1) 江戸期から明治前期：江戸時代には上方と江戸とを結ぶ菱垣廻船の風待港として紀伊大島は栄えていた。明治前期には、チガヤが船舶に欠かせない防水シートとして編まれて販売された。

(2) 明治後期から昭和30年代前半：チガヤは生業に欠かせない防水シート、農業用の「ふご」、海苔乾燥用のスノコおよび葬儀および仏事用庇いとして利用された。これらは「とましばた」と呼ばれる編み機を使い、女性達によって製作された。島内の耕地周辺にはチガヤ草地が入念に管理され、必要な量を供給した。一方、ススキはそれほど多用されなかった。

(3) 昭和30年代から昭和末期：ビニールシートの普及によって、チガヤシートの利用が激減した。また、徐々に儀礼が簡素化され、チガヤ利用が減少した。湿田も続々と放棄され、稲わらの供給が低下した。一方、この頃から暖地花卉栽培が盛んとなったため、農業資材としてススキの需要が高まった。そこでススキ草地の利用が始まった。

(4) 昭和末期から平成期：花卉栽培とキンカン栽培への傾斜の結果、ススキがさらに必要になった。従来のススキ草地に加えてススキ移植栽培も始まった。チガヤの冠婚葬祭利用はさらに減少した。

### Abstract

**Shinya UMEMOTO\* and Hirofumi YAMAGUCHI** (\*Subtropical Plant Institute, Graduate School of Agriculture, Kyoto University; Conservation Ecology, Graduate School of Agriculture and Biological Sciences, Osaka Prefecture University): A Historical Perspective of the Utilization and Conservation of *Imperata* and *Miscanthus* in Agro-forest-fishery Culture System of Kii-Oshima Island, Wakayama Prefecture, Japan. *Sci. Rep. Agric. & Biol. Sci., Osaka Pref. Univ.* **54**: 31-35.

A history of the utilization and conservative management of *Imperata cylindrica* and *Miscanthus sinensis* in Kii-oshima Island off the Kii Peninsula of central Japan was periodically sketched as follows;(1)The Edo to the early Meiji periods: Kii-oshima Island was famous for a refuge port in the Edo period. In the early Meiji period, water proof sheets made by *I. cylindrica* were sold by local peoples.(2)The late Meiji to the early 30's of the Showa periods: *I. cylindrica* was commonly used for water proof sheets for fishery and agriculture, traditional bag for agriculture, small sheets for seaweed drying and ritual purposes. These products were knitted by a wooden device, "tomashibata." Stands occupied by *I. cylindrica* were thoroughly managed in order to supply enough sustainable.(3)The late 30's of the Showa to the late Showa periods: Popularization of vinyl sheets decreased the utilization of *I. cylindrica*. By degeneration of the traditional life of the Island by post-war wetterization also fell off the ritual uses of *I. cylindrica*. At the same time, cultivation of ill drained paddy rice and rice straw as agricultural materials was rapidly decreased. On the other hand, floriculture using the warm climate of the Island was initiated and this invited the lack of rice straw. These situations strongly promoted the development of natural stands of *M. sinensis*.(4)The late Showa to the Heisei periods: Citrus cultivation as well as floriculture needed the more quantity of *M. sinensis* and the cultivation of *M. sinensis* by transplantation became more popular. The utilization of *I. cylindrica* for ritual purposes was almost diminished.

和歌山県串本町紀伊大島は、江戸時代に上方と江戸とを結ぶ菱垣回船の風待ち港として栄えた。その頃から、イネ科の多年生草本でチガヤ *Imperata cylindrica* とススキ *Miscanthus sinensis* は、半農半漁の島の生活を支える重要な資源植物としての役割を担ってきたが、第2次世界大戦後の高度経済成長とともに生業および生活資材としてのチガヤとススキの位置づけは劇的に変化した。1999年に串本大橋によって本州と繋がった後も、その変化は進行している。一方、チガヤやススキの伝統的な利用や管理方法を体得した住民は、高齢者に限定されている。しかも、彼らが持ったいへん貴重な経験的知識・生態技術体系は次世代にほとんど継承されていない。

本稿では、現地調査と古老からの聞き取り結果をもとに紀伊大島におけるチガヤとススキの利用と保全およびその歴史の変遷を大島須江地区を中心に記載する。なお、調査にご協力いただいた各地区の住民の方々に感謝いたします。

### 紀伊大島の地理

紀伊大島は、紀伊半島最南端の潮岬の東沖合1.5kmに位置する。東西8km、南北4kmで周囲は28.0km、面積は9.92km<sup>2</sup>ある。島は台地状でやや南に傾き、少なくとも3つの方向にリニアメントがあり、これに沿って谷が開いている。島の北部は断崖絶壁で異常気象時には船舶の避難水面となる串本湾に面している。最高標高は、島の中央部にある大森山山頂で171.1mある。地質は熊野酸性岩類からなる。島の全体はスダジイ (*Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii*)、モッコク (*Ternstroemia gymnanthera*)、ヤマモモ (*Myrica rubra*) などが生い茂る照葉樹林に被われている。気候的には暖温帯上部に属し、年間降雨量は2600mmを越える。かつては、谷の底部に細長く沿海低湿水田が数珠状に並び、水牛や田舟による耕作が行われてきた(梅本・山口, 2001)が、現在はほとんどが放棄されている。台地の上部には「平見」といわれる平坦地があり、ここには自給用庭畑が散在している。第2次世界大戦後に照葉樹林を開墾して造成した柑橘園が大森山周辺に点在する。島の東端から西に檜野、須江、大島の3地区があり、約600世帯1600人が半農半漁を営んでいる。集落はいずれも漁港に面した谷とその後背地の平見の間に立地している。島は、1999年9月9日に串本大橋によって本州と繋がった。

### チガヤとススキの利用と管理の史的変遷 江戸期から明治前期

紀伊大島は昭和33年に串本町と合併するまでは東牟婁郡大島村であった。島の西端に位置する大島地区にあった旧大島村役場の倉庫に保管されていた文書がある。その文書とは明治政府が明治10年(1877)に大島浦連合戸長役場に調査させ纏めさせた「地誌図書」の写しである(大島小学校創立百周年記念誌編集委員会, 1976)。この資料には大島浦の地勢、大島浦の良港の指摘、当時の戸数、人数、船の保有数、民生関係が記述されている。その中に、大島の物産の項目がある。それによると、1877年には「鶏200羽、鰹5000本、鮭50本(大阪へ輸送す)、するめ3000枚(大阪へ輸送す)、米87石8斗、麦150石、雑穀20石、甘藷13500貫、芋2000貫、天草200貫(大阪へ輸送す)、とま4000枚(質悪く入港の航師に販売す)」とある。大島浦周辺で漁獲・加工されるマグロやスルメイカ、テングサは大阪方面に出荷されたようだが、その他の物産は串本地方に販売されたと考えられる。なかでも注目すべきは、「とま4000枚」である。「とま」あるいは「とまくさ」とは和歌山県の南部の西牟婁郡や中部の日高郡の植物方言でチガヤを指し、串本地方ではチガヤ製品を「とま」という。後で詳しく述べるが、ここでは4000枚のチガヤ製防水シートを意味している。確かに、乾燥したチガヤの茎葉は水をよくはじく。当時、大島浦の人々は内職としてチガヤ製防水シートを編んで小舟で出掛け、風待ち避難港であった串本湾に停泊している船舶に売って回っていたようだ。

江戸期に近畿地方の物資を江戸まで運送していた輸送船は回船といわれる。酒は樽回船で、ミカンなどは菱垣回船で大量に輸送された。江戸に荷を降ろした後は、帰りは房総半島周辺で漁獲され乾燥加工された干鰯を載せ、干鰯は有田ミカンや和泉のワタ栽培の肥料となった。菱垣回船の場合、海飛沫や雨から甲板上の荷物を守る必要があった。このとき防水を果たしたのが「苫」であり、恐らくチガヤで編まれたシートであったと推定される。江戸期の回船の代表である弁財船は、甲板積載量を大きくするために、上荷を苫囲いしたという(小林, 1993)。筑前国志摩郡唐泊浦(福岡県福岡市)所属の伊勢丸の例では、航行中に船から人が海に転落した場合には応急救命具の代わりにまず「苫」や板を海面に投げ込み、その後伝馬船で遭難者を捜索している(小林, 1993)。風待ちなどで串本湾に停泊していた船舶は、たとえ大島浦産の品質が悪い「とま」であっても、それを購入する切実な理由があったと考えられる。

このように、江戸時代から明治にかけては、チ

ガヤとその製品は国内航海に欠かせない必需品であり、紀伊大島では船舶にそれを供給していた。現在、島内に水稲の水田はほとんどないが、串本役場所蔵の古地籍図（コピー）によると、明治時代は島内のあらゆる谷筋が水田として利用されていた。当時は、島内の水田畦畔や谷の斜面には一面にチガヤが生育しており、それ以外の雑草や雑木は除去されていたという。したがって、かなりの「とま」を島内外に供給する体制は整っていたと考えられる。

### 明治後期から昭和30年代前半

紀伊大島では、チガヤはたいへん重要な資源植物であり、あらゆる生業と儀礼に欠かせない植物であった。チガヤとその製品は、おしなべて「とま」と呼称されている。また、材料を確保するために、チガヤ群落は丁寧に管理されていた。島の東端に位置する檜野地区では、江戸時代初期から半農半漁が営まれている。特に地区民による魚付林保全には特筆すべきものがあり（梅本・種坂, 2001a, b）、有用な自然要素は絶えず気を配って管理されていたと考えられる。

明治後期から大正初期にかけては、チガヤは大別して防水シートと冠婚葬祭に使用されている。檜野では古くから「大敷き」といわれる定置網による漁獲が行われている。これは、早朝の2～3時に伝馬船で出漁し、定置網に捕獲された魚類を共同で漁網で船に引き上げる漁法である。当時の定置網や船に積み込む漁網は木綿で作られていたので、大変腐りやすかった。そこで、使用後の乾燥処理や保管時の降雨に対する対策が欠かせなかった。網の保管に活躍したのが、チガヤ製の防水シートである「とま」であった。畳んだ漁網の上に「とま」の表面（後述）を上側に葉先を下向きにして雨滴が降下しやすいようにし、頂部が少し重なるように合掌型にかぶせたという。天候が悪化したときには、闇夜でも出掛けて漁網の上に「とま」をいち早く被せる必要があり、夫がそれを済ませて帰ってくると妻はほっと一段落したという。ふだんは「とま」は納屋の高いところに保管されている。また、当時は調理のための燃料はすべて島内の薪炭林や浜辺などから調達した薪や柴であったが、朝な夕なに大量の煙が発生した。これを利用して長持ちさせるために「とま」を台所の煙で燻される場所に保管した人もいたようである。

この頃、水田や畑の周辺にはチガヤが一面に生育していたという（図1）。これは、完全な自然のものではなく、絶えまない雑草管理によってチガヤだけを残した結果であった。チガヤの種子を播

種したり、苗や株を移植して群落を養成したのではなく、あくまでも要らない混入植物を消去して群落を単一の植物としたのである。

一方、ススキは今ほどは多くなかったが、利用はされていた。紀伊大島にはワラ葺きと「かや」葺きの家があったという。しかも、後者のススキの方が耐久性が高かったといわれる。また、炭俵を編むのには「かや」が好まれたという。さらに、箒はススキで作られている。ある程度の「かや」場もあったはずであるが詳細は不明である。

「とま」はどのように作られているだろうか？まず、晩秋から正月にかけて畑や水田畦畔（「ぐる」とよぶ）や谷の斜面に生えそろうているチガヤを刈りに行く。母子で行くことが多かった。チガヤは、草丈が1m以上にもなったが、鎌で地際から刈り取り、直径20～30cmの大きさに束ね、クズ（*Pueraria lobata*）などで縛る（図2）。その場所ですばらく乾燥するか、そのまま家に運ぶ。葬式用の「とま」造りの場合は、心を込めて良質の「とま」を刈り取った。

「とま」のシートは、「とましばた」という装置によって編まれる（図3）。「とましばた」は、高さ61cm、幅121cmあり、材質はスギである。通常は解体して保管されている。この織機は各家にあり、屋号が焼き付けられていたという。刈り取ったチガヤは「とましばた」で編む工程に移される。予め縄を縛っておき、それをウバメガシ製の「かるこ」に巻き付けておく。「かるこ」は「つちのこ」ともよばれ、直径4.5cmで長さ11cmである。「とましばた」の上に方向をそろえたチガヤを置き、「とましばた」の横木に刻まれた10～15cm間隔の溝を使い、「かるこ」を交互に動かしながらチガヤの稈の下半分を縄で編む。縄を縦糸として莫産状に横に編むのである。稈の硬い部分を編み終わると、上部の葉の部分を折り曲げて、葉先を稈の下部で揃え完成する。出来上がった「とま」は、横70～80cm、縦1m70cm位である（図4）。葉を折り返した部分が表であり、稈の部分が裏となる。一枚の「とま」を製作するのに、2～3束のチガヤ、すなわち1～2㎡分のチガヤが必要となる。また、作業の遅い女性で1日に3枚、手先の器用な人で5枚を編んだといわれ、「とま」は、親戚同士で貸し借りはしたが、地区外に販売した記憶はないという。たいせつに使えば、5年以上は耐用できたようである。また、「とましばた」では、直径40cmの円筒形の「ふご」といわれるカゴも編まれている。

「とま」は、葬儀の際に使用されている。誰かが亡くなると、お通夜、本葬、埋葬と一連の儀が続く。それと並行してまず墓地では土葬用の穴を



図1 紀伊大島の放棄された野菜畑の法面に群生するチガヤ  
昭和30年頃まではこうした光景が島のあちこちに広がっていたと考えられる。



図5 野菜畑の放棄から遷移が進む過程で不要な植物を除去して養成されたススキ群落



図2 水田脇の「とま」場で刈り取られて結束されたチガヤ  
収穫されたチガヤは民具、儀礼や農業の資材となった。

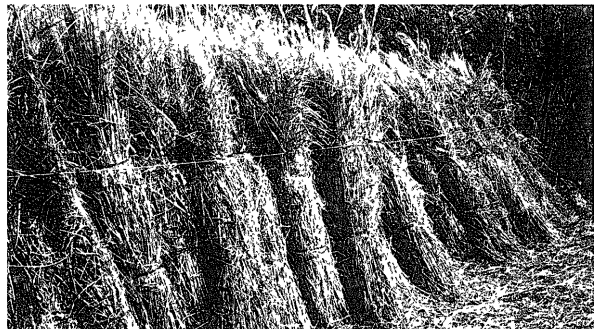


図6 花卉栽培の園芸資材に供されるススキ  
押し切り器などで裁断され土に鋤き込まれたりマルチに供される。昭和40年代の稲ワラ不足から利用が本格化した。

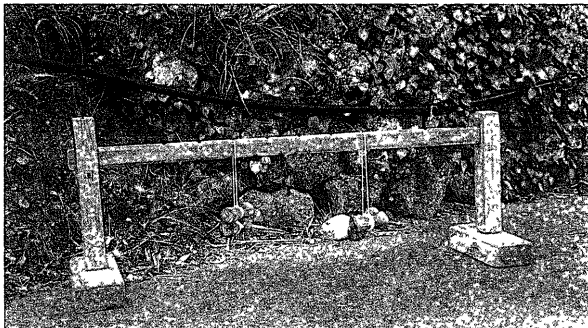


図3 木製編み機の「とましばた」と「かるこ」器用な女性は1日に5枚の「とま」シートを編んだ。高度経済成長期に急速に廃れた。



図7 株移植によるススキの畑栽培  
昭和末期から柑橘栽培用にススキの需要が高まった。

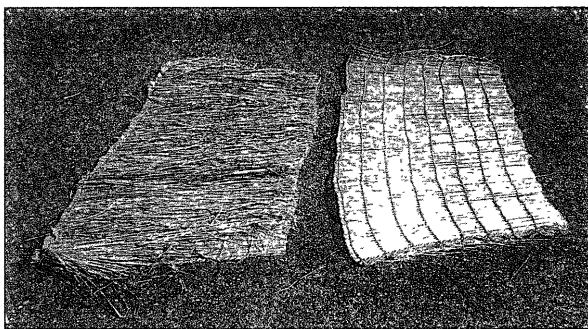


図4 「とましばた」で編まれたチガヤ製防水シート「とま」  
左 表面、右 裏面。この葬儀用「とま」は約50年の利用に耐えている。

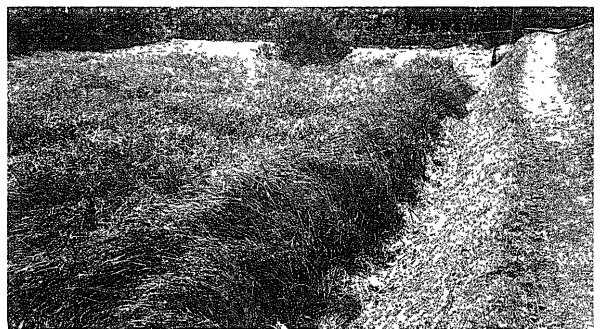


図8 堆肥およびマルチ用のチガヤ畑  
放棄されたサツマイモ畑から不要植物を除去して養成された。

掘る。この間に「とま」を編み、夜露で濡れないように「とま」を穴に被せておく。本葬が終わり、遺体が土葬され、饅頭状に土が盛られて仮の木製墓標が建てられる。この時祭壇となる正面が見えるように「とま」を立て掛け墓標を巻き、縄で縛っておく。この行為はお8日が過ぎるまで続けられた。「とま」を取り外して墓石が定置されると、「とま」は海に流されたという。なお、古くは「とま」で小さい屋根を葺きそれで墓標を被って夜露をしのいだようである(近畿民俗学会, 1984)。須江地区では、葬儀用の「とま」を逝去者ごとに各家で編んでいた時期もあったが、1950年頃から地区の寺がその道具庫に常時5枚の「とま」を確保するようになっていた。この頃から土葬後に「とま」は処分せず、再利用するようになっており、現在も使用されている。

このころ檜野地区の神社では、豊漁と安全を祈願し境内で御祈禱がよく行われている。玉砂利の境内に「とま」シートを敷き、その上に正座して神主とともに祈った。この習慣は現在も継承されている。

8月13日から16日のお盆にもチガヤは使われている。まず、メダケ (*Pteroblastus simonii*) などの竹を振りながら、先祖を家に誘導する。米とナス (*Solanum melongea*) のサイコロ切りをアカマガシワ (*Mallotus japonicus*) の葉に載せ、家の中の祭壇に奉った。奉り物の敷物として使われていたのが「とま」であった。ただし、これは、防水用の「とま」や葬儀用の「とま」とは異なり、心を込めて刈り取った青いチガヤを約25cmに切りそろえ、「とましばた」を使わずに正方形に手織したものである。これも「とま」と呼称されているが、使用後は、焼くか海に流されている。須江地区では、盆のお供えものとして夏野菜3種(三昧)と果実3種(三昧)の計6味を「とま」の上に載せるが、とまのチガヤは編まれてはおらず、刈り取ったチガヤの稈の下部と葉の部分をつ切り分け、水平になるように交互に重ねただけである。使用後は焼くか海に流されている。

正方形の「とま」は、当時、岩場で大量に採取された岩海苔の乾燥にも使われている。岩海苔は、水洗い後に、和紙を漉く要領で「とま」にそっと掬いあげ、とまを壁に立て掛けて天日で乾燥した。夕方までには出来上がり、たいへん香ばしく美味しかったという。一方、須江と檜野地区では、ヨタキ漁(夜間カンテラ漁獲)や伊勢エビを捕るための海老網の漁網を雨から守るため「とま」が使われている。また、チガヤは畑の刈り敷きや肥料として使われており、ススキよりも腐りにくく長持ちしたようである。とくにスイカ栽培では

果実を守るために欠かせなかった素材である。

チガヤの純群落は、須江地区でも畑や水田周辺に確保されていた。「とま」場の管理は入念に行われ、よけいな雑草は除去された。チガヤはあまり種子繁殖せず、おもに根茎で繁殖するので、管理しやすかったという。刈り取りは秋から正月に行われている。

大島地区でも利用と管理は同じような状況であったが、「とま」場が少なかったので須江地区から「とま」シートを購入することもあったという。この状況は、食糧難の解消にサツマイモ栽培の開墾をすすめた第2次世界大戦前後を挟んで昭和30年前半まで続いている。

### 昭和30年代後半から昭和末期

「とま」の製作と利用は1960年(昭和35年)頃まで続いている。しかし、戦後の復興と経済成長とともに半透明または鼠色のビニールシートが大量に出回るようになった。その結果、「とま」の需要は急激に減少し、各家で女性達が「とましばた」を用いて編むことも少なくなった。須江地区では葬儀の際に「とま」を使用するしきたりは廃らなかつたが、檜野や大島地区では葬儀用「とま」は徐々に使われなくなっている。こうした急激な変化によって、チガヤの純群落の管理はおろそかになり、スイバ属 *Rumex* やセンニンソウ属 *Clematis* などの雑草が入りはじめた。また、畑も耕作しなくなり、さらに作業の不便な谷奥の水田から耕作が放棄され始めている。

民生が落ち着き始めた昭和40年頃から須江地区では暖地花卉園芸が拡大し、檜野地区でも柑橘生産が増加した。それまでは、肥料や刈り敷きマルチ用として稲ワラが使用されていたが、水田耕作面積の減少とともに稲ワラの確保も難しくなっている。農協では台湾産圧縮ワラの使用をすすめたが、おかしな雑草が発生するので普及していない。チガヤは稲ワラの不足分を補う形でも刈り取られている。

紀伊大島やその周辺では、ススキは「かや」とよばれ、中秋の名月には使用するが、分布量も少なくてたまに箒が作られる程度であった。須江地区では満州からの引揚者によって戦後に開墾された畑があったが、その多くは放棄され、20年が経過している。そこは、荒地状態から雑草群落、チガヤ群落をへてススキ草原に変化していった。ストックや宿根カスミソウなどの花卉を栽培していた人々はこのススキに目を付け、利用をはじめている。ふつうは自然に遷移したススキが刈り取られ利用されていた(図5)。「かや」場は、無肥料、無農薬で管理され、冬に刈り取り時期を迎え

る。親戚などが総出で「かや」場に集まり、厚手の鎌で刈り取り、直径20~30cmの束とする(図6)。結束にはクズやテイカカズラ(*Trachelospermum asiaticum*)が古くは使われたが、その後黒ビニール紐になっている。草刈りの時、ススキ以外の植物は「かや」場から除去される。ススキは一部が残され刈り取られて、花卉栽培温室やミカン園や畑まで軽トラックで輸送される。こうした「かや」刈りは個人作業の場合もあるが、作業チームが須江には7つ以上も出来ている。この「かや」の収穫は、一年を通してほとんど手間をかけずにほぼ無料で資材を確保できるので、漁業も営む住民にはたいへん受け入れられやすく、急速に地区に広まったようである。

花卉栽培ではススキの束をほどこいて細かく稈を切断する。穂の出たものは種子が入り込むので敬遠される。裁断された稈を山の形に盛り上げて農業用ビニールシートで被い、米糠、石灰窒素、時にはチガヤを入れて夏まで熟成させる。それを8月ころ温室内の土壤に大量に鋤き込み、水を入れてかき回して混和し、地面にビニールシートを被せて夏の高温で処理する。この作業の結果、それまで土壤殺菌していた手間が省けたばかりか、土質が改良されたという。キンカンなどのミカン園でもススキは利用されており、雑草の抑制のために、適当に切断したススキによってマルチされている。ススキは、しばらくすると肥料にもなり、たいへん重宝されている。

樫野地区では、この時期に大規模な花卉栽培はなく、かなり広い面積にミカン園が栽培されているが、須江地区とは異なり、肥料としてはススキよりチガヤが好まれている。樫野では戦後に新たに開墾した畑はなく、ススキ群落に遷移した場所はほとんどなかった。また、大島地区では、「とま」や「かや」をスイカ栽培の時の刈り敷きやサトイモの越冬のための防寒材料に使う程度であった。

### 昭和末から平成期

須江地区では、花卉栽培への傾斜が進んだために、ススキはさらに必要になっている。たとえば、県道沿いの方面に生育するススキを刈り取ったり、空き地や放棄畑、道沿いの造成地にススキ株を1~2m間隔で移植する栽培者が増加し(図7)、この傾向は、1999年の串本大橋の開通後もみられている。

一方、チガヤは葬儀および盆には依然として使われているものの、農業資材としてはほとんど利用されなくなっている。葬儀の際も地区の寺所有の「とま」が繰り返し使われている。土葬がなく

なり火葬となった現在でも小規模な墓穴を掘って儀式はいとなまれている。「とま」の編みの上手な高齢な女性も2001年に亡くなっており、盆のお供えの敷物にもチガヤを使わず、スーパーで市販されている代替物を使う人がふつうとなっている。「とま」の存在も消えようとしているが、その結果、良好な「とま」場はますます少なくなり、以前は「とま」場であった畑や水田の周囲もチガヤが散生する植物群落となっている。年に2、3度行われる草刈りの時、チガヤに注意を払う人もなくなっている。また、葬儀に使われた「とま」は海に流せなくなり、焼かかゴミとして回収されている。

樫野地区では、ススキはキンカン栽培のマルチに良いという評判になり、徐々ではあるが「かや」場が増加している。この地区でも最初は生自個体群を見守りながらよけいな植物を毎年取り除く手法で「かや」場を管理していたが、1990年半ば頃から筆数は少ないが、移植される例が現れている。一方、「とま」にこだわる農家もあり、彼らは数筆のチガヤ畑を養成している(図8)。余計な植物を取り除きながら冬に刈り取り、直径20cm程度に結束してトラックで運び、野菜畑に鋤き込んだり、キンカン畑でマルチ材として使われている。この地区では、葬儀には全く「とま」は使わなくなっている。盆でも「とま」を使う人は若い世代ほどいなくなり、市販の敷物を使い捨てるようになってきている。なお、1990年初頭から始まったアオノクマタケラン *Alpinia intermedia* の山取出荷で「とま」シートを包装材料とした例もあったが、現在は段ボールの化粧箱が使われている。

大島地区では、さらに「とま」や「かや」と生活との関係がさらに希薄となっている。しかし、葬儀の時には、須江地区から借りてはいるが、「とま」を使う家もある。

紀伊大島では、江戸時代から昭和30年ごろまでのチガヤの優占的な利用から昭和末から平成期のススキの優占的な利用への移り変わりが明らかである。この移行の背景に近代化にともなう生業の変化があるのは明瞭である。また、自然資源からビニール製品への転換が単純に経済的効率に関わるだけでなく、儀式や文化の伝承にも影響することも明らかになった。

日本の暖温帯の植生は、草刈りを主とする攪乱によって、シバ群落、チガヤ群落、ススキ群落という3種の草地に遷移あるいは移行する。水稻の栽培の少ない紀伊大島においては草刈りによるインパクトは比較的弱く、チガヤとススキの草地が成立するのはきわめて自然とあって良い。そのな

かにより利用のインパクトが強い条件で人為的な選択も加わってチガヤ群落が発達し、利用のインパクトが緩やかになるにともなってススキ群落が成立している。インパクトの程度を決める要因が人間の側にあるとは言え、自然の植物のあり方が目にみえない儀礼のあり方の形で人の文化や生活にも影響している事実は、人と自然の調和関係を考える上で着目すべき点である。また、植物と人間の相互関係において、平素（ケ）の生活を支える経済に関わる部分は速い速度で置き換わり、経済には関わりの薄い（ハレ）の部分ではやや遅い置き換わりとなっている。紀伊大島のチガヤからススキへの置き換わりは人と自然と倫理との視点からさらに分析される必要がある。しかしこの傾向は、紀伊大島の人と自然の共生系が不安定化していることを示しており、伝統的に育まれてきた共生系の秩序化（チューニング）の完全な崩壊を意味している。魚付き林や水源や森に畏れを感じるようなアニミズムの発達が乏しい人里の環境における生態的要素の関係では、それが人の利害に関わらないなら、若年世代による維持や復元が困難なのかも知れない。

### 引用文献

- 近畿民俗学会 1984 和歌山県西牟婁郡串本町大島民俗調査報告（二）近畿民俗 96・97, 55-73
- 小林茂文. 1993 漂流と日本人—漂流記に見られる異文化との接触—海と列島文化 別巻 漂流と漂着 小学館, 東京 93-176
- 大島小学校創立百周年記念誌編集委員会 1976 産業と物産 おおしま 大島小学校創立百周年記念誌 29-33
- 梅本信也・種坂英次 2001a 紀伊大島檜野地区の魚付保安林の歴史—字黒山および字棹取平三を中心に— 近畿大学農学部紀要 34, 165-172
- 梅本信也・種坂英次 2001b 紀伊大島スダジイ林の巨大なシイサルノコシカケ 南紀生物 43 (1), 27-29
- 梅本信也・山口裕文 2001 田舟と撻斗と龍船と 金子努・山口裕文編 照葉樹林文化論の現代的展開 北大図書刊行会 315-334

(2002年2月18日受領, 2002年2月20日受理)